

ネコの大脳

岩手大学

【動物】ネコ，雑種，去勢雄，4歳3ヶ月齢

【臨床症状】3歳9ヶ月齢頃から食欲不振，ふらつきが見られたため，某動物病院を受診した。4歳になって痙攣と左方向への旋回を示すようになった。MRI検査では左小脳から後頭葉にかけて造影増強効果を示す腫瘤様病変が認められた。トキソプラズマ抗体価は1:2000，FeLV抗原は陽性，FCoV抗体価は1:400であった。初診から6ヶ月後に死亡した。

【剖検所見】左脳頭頂葉表面は約1cm面大にわたり褪色，軟化し，乳頭体を通る前額断面では頭頂葉灰白質から白質にかけて径約1cmの境界不明瞭な淡褐色壊死巣が認められた。

【組織所見】主な病変はマクロファージ，好中球の浸潤を伴う多病巣性壊死であった。脂肪顆粒細胞またはリンパ球の集簇巣がしばしば認められ，多核巨細胞も散見された。これら壊死巣辺縁では囲管性細胞浸潤，グリオースシス，重度の血管新生がみられ，病巣内外にはまれに原虫のシストが認められた。

【診断】

病理組織学的診断：髄膜脳炎，多病巣性，慢性，重度，広範な壊死と病巣内および周囲の原虫性シストを伴う

疾病診断名：トキソプラズマ症

【考察】免疫染色で，原虫のシストは抗 *Toxoplasma gondii* 抗体陽性となった。また，18SrRNA 遺伝子，B1 遺伝子のシーケンズ解析では *T. gondii* のそれらの配列とそれぞれ99.9%，100%の相同性を示した。以上の成績から，疾患名をトキソプラズマ症とした。本原虫の終宿主であるネコでも，免疫抑制剤の投与あるいはレトロウイルス感染などで免疫不全状態に陥ると，発症することがある。全身感染に至らない場合，原虫はほとんどの症例のCNSから検出されるが，神経症状を示すのは約1割に留まる。慢性の中樞神経系(CNS)病変は脳，脊髄，骨格筋のいずれかに潜伏していたブラディゾイトが再燃すると起こりやすく，こうした例では全身症状は現れず，CNSあるいは眼の症状が見られることが多い。

(中島冬萌・落合謙爾)

【参考文献】

- 1) Dubey JP, Lappin MR. Toxoplasmosis and Neosporosis. In: Greene CE, ed. Infectious Diseases of Dog and Cat. 4th ed. St. Louis, MO: Elsevier Saunders; 2012:806-827.
- 2) Gunn-Moore D, Reed N. CNS disease in the cat, current knowledge of infectious causes. J Feline Med Surg. 2011;13:824-836.